**球磨川 / 球磨川の交通・輸送の歴史と球磨川くだり**

人吉を囲む山々は、城下町にとっては天然の防衛手段となった一方で、移動、貿易を困難にしました。17世紀末になり、球磨川は主要な水路として発展し、人吉球磨地域の経済成長を一気に促しました。

 相良家第22代藩主の相良頼喬（1641-1703年）の命令により、自然の障壁が取り除かれて球磨川は開放され、船が通りやすくなりました。開発計画には数年を要しましたが、1664年に遂に完了しました。球磨川河口の城下町と貿易拠点であり、人吉から北西へ50キロ進んだところにある八代と人吉の間を、川舟が安全に行き来することができるようになりました。

 球磨川の開発は、相良家と一般の人々に多くの面で恩恵をもたらしてくれました。首都である江戸（今日の東京）へは、はるかに容易で速く移動できるようになりました。相良藩の川に面した城の門をくぐると米蔵が2棟建っており、各地域の人々は、相良藩へ直接年貢を届けることができました。また、相良藩は、灌漑システムを導入し、川の水をより内陸の田んぼへと引けるようにしました。稲作農業が可能な土地が増えると、生産量は高くなり、それにより相良藩の勢いは増し、地域は経済的に豊かになりました。

 19世紀末になると、日本は急速に近代化が進み、開発の拡大により、木材の需要も高まりました。林業は川沿いのもうかる産業となり、木材はいかだを使って下流へ運搬されました。そのうち現代の建築資材が利用しやすくなると、林業は衰退していきました。しかし、これが国内旅行産業の成長と重なり、木造のいかだはレジャー用ボートに取って代わられ、また、より最近では、ラフティングボートやスタンドアップ・パドルボードに取って代わられました。